

猫蓑通信

第 87号
平成 24年
(2012年)
4月15日発行
(年4回発行)



「新しみ」こそ連句の華 青木秀樹

座の文芸である連句は楽しくなければいけない。だが、楽しいだけで良いのだろうか。楽しい席で巻いた作品が他者の鑑賞・批評に耐えるものに仕上がれば楽しさはさらに大きくなるだろう。

芭蕉の言葉として「たとへば歌仙は三十六歩也。一步も後に帰る心なし」と服部土芳は『あかさうし』に書いている。変化こそ連句の根本的なルールであることを示している。これに対して正岡子規は『芭蕉雑談』の中で「発句は文学なり。連俳（俳諧）は文学にあらず。（略）連俳固より文学の分子を有せざるに非ずといへども文学以外の分子をも併有するなり」、さらに「連俳に貴ぶ所は変化なり。変化は則ち文学以外の分子なり」と連句非文学論を展開した。東明雅先生は『連句入門』（中公新書）の中で、変化を貴ぶ連句の文学性を、

- ① 一句一句の独自のおもしろさ
- ② 前句と付句との間に生まれる付味のおもしろさ

③ 三句目の転じのおもしろさ
④ 一卷全体の構成とその変化・調和のおもしろさ

の四点にあるとして、芭蕉の作品から例をあげて説明されている。

連句は変化を貴ぶ文芸であることは、すでに現代の連句人には常識になっている。連句一卷には春夏秋冬が詠まれ、様々な人の営みが活写される。時には過去の人物や出来事、また未来のことすら詠まれる。目の前にあるものを詠むだけでは一卷は成立しえない。連句は、過去に自分が経験したことや様々なメディアを通して知ったことなど、記憶の中に刷り込まれた多様な事柄を手がかりにして連衆が一句一句を創作し、その中から捌き手が一句を選んで治定して進める「虚」を中心とする文芸である。

明雅先生は、連句を世態人情諷交詩と定義され、現代の連句には現代が感じられる新しさが必要だとも言われた。『七部集』には芭蕉の生きた時代が描かれているが、それから三百年余が経過して生活環境が大きく変化している。評釈なしに七部集を理解できる人は少ないであろう。しかしそれは「流行」の宿命であり、決し

●目次●

第百二十回例会初懐紙作品	歌仙十巻	2
第二十回岐阜県文芸祭連句部門受賞作二巻		
短歌行「胡弓泣く」		7
風の盆	遠藤央子	7
短歌行「白百合や」		8
岐阜土産	奥野美友紀	8
蕉風俳論抄『去来抄』		9
温故知新7・付ける能力とネアンデルタール人		10
卯遊庵宗匠とつらら会	橘文子	11
追善歌仙「冬構」	吉藤一郎 捌	11
事務局たより		12

て芭蕉を貶めることにはならない。

明雅先生の説く前記四点のおもしろさは、それぞれの「新しみ」と言い換えてもよいであろう。一句一句に詩としての新しみ、二句の付合いで付味の「新しみ」、三句の渡りでの転じの新しみ、そして一卷を通してメリハリがあり、現代の連句としての新しさが漂う作品を私たちは共同して作りたいものである。

晩年の芭蕉は「不易流行」の論を唱えて俳風を一新した。一卷の作品に新しみがなければ、ただ伝統を舐めているに過ぎないだろう。伝統を継承するということは、古臭いことをそのまま受け継ぐことではなく、芭蕉の心法を現代に生かし、現代ならではの連句作品を残すことであろう。

一・初日の座
歌仙「晴れやかに」 副島久美子 捌

晴れやかに鳴るニューイヤークンサート 久美子
 淑気漂ふ回廊の間 泉子
 野に出れば東風はやさしく頬撫でて 剛
 紋白蝶を追ひかける子等 わこ
 月円か窓辺に育つヒヤシンス 碧
 自慢のパターけふも磨きぬ 和代
 あらたかな産土神は頼もしく わ
 幼馴染みに出会ふ偶然 剛
 柔肌にすつきりはまる深情 わ
 ポンと叩いた天花粉なり 泉
 蟻の列遠くローマへ続きぬ 碧
 馬の競市札びらが飛び 泉
 長き夜積んどくままの本の嵩 碧
 月の酒なら友と剣菱 わ
 クレーン車除染の土を吊り上げる 和
 沈黙考托鉢の僧 泉
 雨戸繰るいよいよ紅し寒椿 剛
 追儼の豆のあちらこちらに 和
 ナオ スピーチを二分で済ます町会長 泉
 絆の固くみちのくの民 わ
 行きつけのいつも賑はふあんみつ屋 剛
 登山帽子の掛けてある壁 泉
 液晶に糺の涼み楽しまん わ

衿を正して保つ品格 泉
 シーア派が彼女と決めたスンニ派嬢 碧
 枷多きほど燃え募る胸 泉
 四次元の世界は凍てて静まりぬ わ
 鉄腕アトム何処に行つたの 泉
 故郷はあの山辺り月仰ぐ 和
 街道沿ひに柿を売りつつ 碧
 ナウ 赤い羽根提供するのはどんな鳥 碧
 バリアフリーの進む駅頭 泉
 長椅子は母の窪みの付いたまま 碧
 変体仮名を散らし書く人 和
 丘に立てば海に向ひて花吹雪 久
 小舟に揺られ春惜しむ夢 剛

二・初空の座
歌仙「米壽の春」 倉本路子 捌

連衆 青木泉子 正田剛 横山わこ
 松本 碧 長崎和代
 幾山河越えて米壽の春迎ふ 路子
 茜さしたる庭の櫓 美奈子
 竹削り錦絵風を作るらん 英雄
 鶯餅で薄茶一服 洋子
 月仰ぎ手を合はせぬ受験生 敬子
 駅中コンビニ客のひしめく 一枝
 ウ ピツピツと電子マネーが幅きかせ 洋
 ふと愛妻の匂ひただよ 奈
 美少女を射止めた漢鬼瓦 枝

諸焼酎を呷りひと節 敬
 汗しとど鬨の声聞く田原坂 洋
 アメリカ去つて荒れるアフガン 枝
 回教の尖塔高し月蒼し 英
 驢馬曳く子らに木の実降りくる 奈
 すずる寒北へ思ひをつのらせて 敬
 すめらぎの訪ふ民草の宿 奈
 花朧神話の国を彩るか 洋
 筑波の道を行けば軟東風 路
 ナオ イースター足並揃ふ鼓笛隊 奈
 戦後をしのぶハーシーの味 洋
 かはいいともつたないが世界語に 同
 いったい何なの一体改革 奈
 たれもかも頬冠りして知らん振り 洋
 だるまストーブ燃やす文殻 枝
 添へぬなら御歯黒溝へ身を投げん 枝
 いつまで続くその角隠し 奈
 伝説の詐欺師は遂に扉の中 英
 ホリエモンから娑婆へ繰り言 敬
 蟪蛄の斧を磨けば月細し 奈
 精霊舟のたゆとうてをり 枝
 ナウ 酔ふほどに腰の重たき今年酒 英
 美しき骨ヨガにきしませ 敬
 数へ歌故郷の友懐しく 枝
 夢の余白に母のちんまり 奈
 花ふぶく三つ葉葵の由緒寺 路
 門前市ののどらかな午後 敬

連衆 鈴木美奈子 鈴木英雄 大島洋子
 須賀敬子 西田一枝

三・初東雲の座
歌仙「約束の」

青木秀樹 捌

約束のやうな晴天小正月

秀樹

丹塗りの椀に盛るあつき粥

ふみ

呼鈴に抱いてる猫の跳び起きて

則子

実家より来るダンボール箱

弘佳

銀盤の照らす広野に影もなく

士郎

案山子にさせる父のお下がり

弘

平壤の主の替はりて冬近し

弘

うしろに楚々と佇ちつくす人

み

遅れるとメールで詫びるほどの仲

則

払ふ代償指輪五つ目

弘

教会の鐘ふいに鳴り十字切り

み

結跏趺坐して独り冷酒

士

初蛩桂男が連れてくる

弘

バックミラーに赤の点滅

み

北海道だれもが飛ばす直線路

則

湿原望む丘で休息

士

足りること知る歳になり花浴びて

み

子らは脚立で巢箱観察

弘

ナオ
ふらごこの揺れみで風のほかはなし

み

組解散の危機のまる暴

樹

外ッ国もオレオレ詐欺のあるらしく

則

濃い珈琲にミルクたっぷり

み

長所には違ひのわかる奴と書き

弘

寒風すさぶ白亜紀の崖

樹

世を捨ててなまこの眠る海の底

士

帰りたくない離れたくない

み

病室の彼を独占してをりぬ

弘

ホテルつぎつぎ外資系なり

み

停電に驚きの声丸き月

則

金木犀の香り辿りぬ

弘

ナウ
母老いて故郷の野山綾錦

み

中学生の書家は神童

弘

ノーベル賞もらひし夢の心地よく

士

吹奏楽の響くステージ

則

しだれ咲く花の盛りの古戦場

樹

摘草をする午後のひととき

則

おれは持つてる頁がれる訳

鐵

静即動唐津茶碗の空気読む

蓉

ボンクラーズに負けた名人

惠

電波塔拗けたままで夏の月

鐵

峰入をして心機一転

織

カデンツァを白い楽譜にのびのびと

惠

老ピアノニスト奇しき左手

蓉

念ずれば花ひらくとふ龍の寺

同

太極拳に風のやはらか

惠

ナオ
地球儀にアラブの春のあとを追ふ

蓉

ブルカの瞳まばたきもせず

織

五番目の妻になる気はありません

鐵

何で計れる愛情の多寡

惠

イケメンは金も力も無くていい

同

槌音高き漸寒の空

織

町内の振舞ひ酒を月覗く

惠

鍋いっぱい蝗煮てゐる

織

候補者の選挙ファン্ডに差ができて

鐵

まだ生きてたと訃報驚く

惠

朝刊を社会面から読む習慣

織

四コマ漫画分らない落ち

惠

ナウ
終の日は自分探しの旅に出る

蓉

喰ひきれぬほど猿に悪夢を

惠

取り敢へず核廃棄物積んでおく

鐵

なんの苦も無いうちの緑児

蓉

ホールインワン祝ふパーティー花万朵

織

膝まで曲る芝の陽炎

執筆

連衆
平林香織 林 鐵男 鈴木千恵子

五味蓉子

ウ
逃亡犯を女匿ふ
睦言の英語ちんぷんかんぷんで

織 惠 織 惠 蓉子 千恵子 鐵男 香織 蕉肝 近藤蕉肝 捌

四・初茜の座
歌仙「放鷹」

近藤蕉肝 捌

放鷹や富士も眺めるビル杜

蕉肝

記念写真は立松の脇

香織

卒業の衣装も同じ双子にて

鐵男

パステルカラー重ね菱餅

千恵子

土匂ふ断層海岸出でし月

蓉子

浜防風を摘んで帰るさ

惠

東西に格安切符活用し

織

逃亡犯を女匿ふ

惠

睦言の英語ちんぷんかんぷんで

織

五・初晴の座

歌仙「初日記」

式田恭子 捌

初日記ただ晴とだけ書きにけり 恭子
 ゆつくりと飲む福茶一服 有子
 人来鳥連れだつやうに坪庭に 豊美
 残る雪踏む児等のよろこび 曜子
 ビルの間少しのぞけば朧月 敦子
 町それぞれの匂ひ異なる 有
 蘊蓄も年々長くクラス会 敦
 カラオケ上手愛称はママ 豊
 腹巻と云へどかはいく見せたいの 曜
 寒紅うすく塗つてやる指 敦
 注文はいつもきまりのおかめそば 有
 阿波踊りの連繰り出して来る 豊
 橋わたる夜行列車にまろき月 曜
 刈田道には落穂点々 豊
 張り込みの刑事はかかとすりへらし 敦
 ポスターに描く眉とつけひげ 恭
 大花火ポンポン蒸気渡る川 豊
 ちよつと振り向く夏帽の人 有
 ナオ 緑陰に外交語る元首相 豊
 自前の窯をつききりで見ると 曜
 神頼み二礼二拍手何度でも 敦
 龍の口からほとぼしる水 豊
 炉話に昔々の恋あまた 曜

寝乱れて聞く北風の音
 好運を招く印鑑購入し

百円起業成功の夢

高層のドバイにもあるバブル塔

断捨離の術姑に教はる

月の寺警策に目を覚まされて

瓜坊つうと横切つて行く

ナウ運動会パパもがんばる徒競走

靴の片方見あたらぬまま

湾岸のあかりはきつとLED

電気自動車春の内覧

花衣広げて映す大鏡

猫の仔抱いてうたた寝の縁

連衆 佐々木有子 高橋豊美 前田曜子

武井敦子

六・初風の座

歌仙「女神さま」

杉山壽子 捌

初富士や貌の見えない女神さま 壽子
 春の小袖を纏ふ会場 遊民
 砂場へと幼き子らは駈けだして 霞
 ためらひがちに深く呼吸を 美代子
 月今宵老舗の味はおつな物 民
 夜なべきりなくネット対談 代
 秋あつし玄武岩など尚あつし 同
 旅の鞆に収ふ秘め事 壽
 夢中です睫は長くしどけなく 代

ヒーローヒロインなりきってゐる
 政権は誰が執つても同じこと

新幹線はおらの町にも

モトクロス炎暑の中の大熱戦

黒鯛釣りし有明の磯

酒盛りの余興はいつも尺八で

うつらうつらとあの世この世と

朧夜の花はほろほろ零れつつ

蛇の羽音と時鐘告ぐ刻

ナオ 瀬戸内に団扇作りの名手あて

地平線には犬と少年

忘却は忘れ去ることとはゆかず

漢字検定二級合格

店先に奴のごとく冬薔薇

ロンドン塔にしんしんと雪

膝に寄るペットの足裏感じをり

胸の谷間がきゅつとせりだす

衝立にふたりで隠れ殺す息

しりとり遊びんでお終ひ

先読めぬ為替相場は三日の月

拝み太郎が掴むげた箱

ナウ 街なかをハロウインの列賑やかに

祖母が未だに作る蒸し麵麩

蔵草履履いて宝をさがしをり

夕行が力行にいまま治らず

東西の人種るつぼの花万朵

名残暖炉を了ふ頃合

連衆 内田遊民 高塚霞 山田美代子
 吉田酔山

七・初松籟の座

歌仙「粥占」

山口美恵 捌

粥占は吉らし爆ぜる笑声

美恵

歩くたんびに揺らす繭玉

孝子

上り梁魚影の濃さをたしかめて

暁巳

蒲公英を摘む幼子の群

陽子

弥生野の月出る頃に鳴るチャイム

啓子

特急列車風巻いて行く

孝

沈黙の黒の背広の倚る柱

陽

粉末ルビーで化粧ふお仕事

孝

わがものとなれば浮気も許しませう

啓

私小説にて芥川賞

巳

下京のホルモン焼の烟る辻

孝

伏せたる井戸にこぼろぎの啼く

啓

月光にさりさと研ぐ鑿いくつ

孝

隣の菊師刎頸の友

巳

億のカネ一切知らず秘書任せ

陽

猫の葬式盛大にする

恵

高僧の仏子抱けば飛花落花

巳

的屋ふらりと旅に出る春

陽

ナオ立雛の並んでしんと留守の部屋

孝

お軸に太く寂とあるのみ

巳

監督の相好崩す先取点

孝

鏡り落したり幻の酒

啓

垣間見し異国の姫にあくがれて

孝

だっこでベッドへ連れて行つてよ

啓

腰痛は土用の灸にかぎります

巳

縦に横にとはたた神過ぐ

啓

宗達と光琳のみたあの時代

孝

切り捨て御免パート契約

陽

残業の合間眺める窓の月

同

べつたら市も店たたむ頃

巳

ナウ関取の自転車軋むうそ寒に

孝

碁盤に乗ったサーカスの象

巳

放射線授業はとても難しく

啓

飴を嘗めれば吸収のよき

陽

花筏波にのまれる佐多岬

恵

郵便配達つつむ陽炎

陽

連衆 坂本孝子 島村暁巳 佐藤陽子

小池啓子

八・初風座

歌仙「初芝居」の巻

染谷佳之子 捌

川風や幟はためく初芝居

佳之子

春着姿も賑やかな時

未悠

ランドセル足じゃんけんの背に揺れて

千町

にゃんにゃんにゃんと猫のじゃれつく

要子

縁側に月影皎と過ぎりける

鄭和

蓋を開ければ湯気の栗飯

同

ウ 芸術祭映画の賞を総嘗めに

同

艶めかしいぞ韓流の男

和

幼馴染ぶつきらぼうに恋語り

町

言えない所ちよいとつつかれ

悠

二胡の音暗く寂しく漏れきたる

和

菅笠被る道祖神達

和

冷酒をぐいと呷れば月中天

町

ぐるつとまはつて宇宙遊泳

要

白犬が高給取りの世となりて

和

格差社会を生き延びる策

悠

花見舟戦禍の橋へ手を振りぬ

要

大道芸にもらふ風船

町

ナオ遍路宿老若男女入り混じり

悠

座るときついジーパンの膝

町

ナツシユビル今はカラオケ流行りゐて

和

いつも空いてる禁煙の席

悠

寒卵ぽんと割つたら双子なり

要

褒姒の裔か火事が大好き

町

噂とは違い可愛くあどけなく

同

タトウの痕を隠し通して

和

タクシーは和服割引京の町

要

生八つ橋をどうぞご試食

之

咄家の鞆持ちして真夜の月

悠

涼新たなり両開き窓

町

ナウ櫛紅葉鬼女山姥もひそみをり

同

猿もいで湯に連れ立ちて来る

要

医療ミスしどろもどろの言い訳で

悠

札束だとは知らず受け取り

町

短冊を請はるるままに花の枝

同

靴紐ゆるめ歩く雲雀野

要

連衆 柵町未悠 原田千町 山本要子

高山鄭和

平成二十四年一月十五日
於 ホテルフロラシオン青山

九・初霞の座

歌仙「独楽澄むや」

鈴木了齋 捌

独楽澄むや宇宙いまなほ新しき

了齋

ひとかたまりに福寿草咲く

淳子

春鰯大漁旗を押し立てて

雅子

散歩の足の止まる時折

志世子

旨寝子の頬を撫でやる月の縁

昭

形よき諸竈に盛らるる

雅

秋拾米沢間道着こなして

淳

越して来たのはひとり者らし

同

浮雲が呼ぶ旅心恋心

世

草に埋もれ切支丹塚

雅

急坂を拷問坂と言ひつべし

昭

当分禁句落ちる滑るは

淳

鶴来たる開業近き塔越えて

昭

酔漢ふらり凍月の影

雅

太郎冠者御幕を揚げて御前に

淳

連れ立ちたれど疲れ候

世

見はるかす百万石の花盛り

淳

昆虫図鑑買うてうららかに

世

ナオ 復興の渚を包むたびら雪

雅

お誕生日に肩たたき券

淳

ださくつてきもくてやばい若者ら

同

老いの想ひ出濃淡のあり

昭

たまさかの夢にマリリンほほゑみて

雅

抱けば瘡のやうな灼熱

世

氣象台浮き世の風にかかはらず

同

暴動ひとつ起きぬ日本

淳

ユーロ安誰かが裏で高笑ひ

雅

寒夜の鐘を一心に撞く

世

月渡る馬塞の真上の空の紺

世

西域へ往く友と酌む古酒

斎

ナウ 振り向けば丘また丘の未枯るる

昭

機嫌よき日は歌ふ童謡

世

真行草生き様わけてしなやかに

雅

カップラーメンまこと簡便

同

花蔭にぼんぼり並ぶ揚屋町

斎

くるくると巻く永日の文

昭

連衆 上月淳子 武井雅子 秋山志世子

松原昭

十・淑気の座

歌仙「初雀」

松島アンス 捌

蹲の水燦めくや初雀

アンス

淑気漂ふお庭拝見

三実

しつかりと入学証書両の手に

常義

待ち合はせする駅ののどらか

明子

ワイン酌む窓に揺れをり朧月

節子

選曲楽しJ・POP聴く

文字

ウ 浮世絵師北斎の名を道冠す

実

そこはかとなく匂ふ佃煮

ア

合鍵を莨ケースに忍ばせて

明

逢引に行く非常階段

義

狂ほしき禁断の恋月暑し

文

怖くはないわ地獄極楽

節

カタカタとモール信号打ち続け

ア

恩返しとて鶴の織る綾

実

山の端にふはり漂ふちぎれ雲

義

郷にとけこみ有機農法

節

花守の一声に弟子集まりぬ

明

稲荷祭にプードルを連れ

文

ナオ 新調の春のコートはロング丈

義

卓球台の順番を待つ

明

金の卵多き昭和は遠ざかり

実

孤高の風に太陽の塔

ア

謎めきしヒエログリフを読み下し

節

砂漠の薔薇の手触るれば崩え

文

ぱつちりと眼大きな蠅が来て

明

冷たき性と人は言ふなり

ア

振り返るモノクロ写真夢の刻

文

紅葉と鹿のタトウーちらちら

節

十三夜居酒屋親爺寡黙にて

義

忘れ団扇でいつばいの柵

明

ナウ そぞろ寒小筐の底の銀時計

節

これで良いのか人事改造

文

ブレーキと思ひアクセル踏み込んで

明

有磯海には潮の香ぞ濃き

義

こんたつの祈り静もる花の雨

ア

エッセイ集を開く暖か

文

連衆 滝沢三実 生田日常義 野口明子

長坂節子 橘 文字

平成二十四年一月十五日
於 ホテルフロラシオン青山

第二十回岐阜県文芸祭連句部門
受賞作二巻

岐阜県主催の平成二十三年度岐阜県文芸祭の連句部門にて、遠藤央子さん（第二十回記念賞）と奥野美友紀さん（優秀賞）揃きの各作品が受賞しました。

第二十回記念賞

短歌行「胡弓泣く」

遠藤央子 捌

ねむりてもなほ胡弓泣く風の盆

央子

暈をぬぎつつ傾きし月

千代子

電子辞書南京豆とかたはらに

和代

めがねの弦を少し調節

有子

ウ 動輪の鉄の力を撫でてをり

路子

ラグビー選手僕の兄ちゃん

達子

ギプスした猟犬に会ふ散歩道

千

弱い振りする彼とゐる時

有

頭金ばつと女の底力

央

政経塾より初の宰相

千

里山は古戦場とや花ふぶく

和

あちらこちらに伸びるはこべら

有

ナオ 亀鳴くかどうかと甲羅叩きみる

千

七の段だけつつかへる九九

有

サーカスのテントを畳むピエロ達

和

北のホテルに集ふ老優

同

しっかりと教育勅語披露して

路

恋敵へと草矢放てり

千

抱きしめし頃の汗のひかる月

和

ナウ 真珠の耳輪片方が失せ

いつよりかこんなところに隠し酒

布袋に優る笑顔にんまり

行き行きてあつ初花とひとりごつ

パステルカラー春の装ひ

有 千 路 央 達

連衆 山本千代子 長崎和代 佐々木有子

倉本路子 篠原達子

平成二十三年九月六日 首尾

於 高田馬場ルノアール

風の盆

遠藤央子

雨のなかを門に向かつて角を曲がると、濡らさずに折らずにと首をひねっている郵便やさんがいる。駆け出して、ほっとした笑顔から受けとった。二つ折厳禁とある。

岐阜県文芸祭の賞状。賞状……小学校書初展以来のことだ。丁寧に開封してそつと床の間に立てかける。

連衆のひとりひとりが思い浮かんだ。

二〇〇三年、「越中おわら風の盆ひとり旅」に参加した。九月三日、夫の死後はじめてのひとり旅である。

ピシッと締まった股引に法被姿の、しなやかな男踊り。はなやかに哀調切々たる三昧の音。肺腑を衝く胡弓の歎歌が忘れられない。

このときの句を発句にとつていただき、捌く

ことになってしまった。

連衆の、特に倉本路子さんのお力が大きい。

貴重な紙面をいただいたので、先師平井照敏の連句に触れさせていだきたい。

師は連句にも情熱をもっておられ、芭蕉の言葉をひいてこういうことを言われた。

1・芭蕉は発句より連句に自信を持っていた。使命といった方がいかもしれない。

2・歌仙を五巻共にして芭蕉の骨法がわからぬようでは、一生連句はものに出来ないだろう。

3・連句だけやっている者よりも、他の二芸に秀でた人の方が、連句の骨法を早くのみこむ。

こう触れられて「この芭蕉が五巻なら倍の十巻にして合宿錬成し、あとは捌きながらそれぞれ工夫熟達してゆくように」と、一泊の連句の旅にお連れ下さった。

義仲寺発行の『俳諧歌仙序手引』と、東明雅『夏の目』巻末の歌仙標準型の表に従って、指導が進められた。

思い出深い歌仙の作品である。

歌仙「くりしめじ」の巻

平井照敏 捌

うりなすびくりしめじみなうれしかり

照敏

赤松の枝にかかる新月

央子

暮の秋鮎の甘露煮売られぬて

信國

お茶はいかがと茶碗右手に あや子
 飛び乗りし電車は北へ走り出し 國
 次の駅にて戻る迂闊さ 國
 土用波めつきり浜のさびれたる 國
 岩かげに待ち鳴咽するひと 國
 砂蹴つて駆け寄りさまに肩を抱く 國
 大統領は救ひだされぬ 國
 港町あまたの国旗打ち振られ 國
 島で描きし遺作すばらし 國
 壘に出て仰ぎてゐたり冬の月 國
 風のかなたへ神を送りぬ 國
 かたまつて穴を覗ける子ども達 國
 中にはをらむのちのファープル 國
 滝となりなだるる花や声をのみ 國
 卒業式の準備ととのふ 國
 ナオ 落ちひばり冠毛に死者とりすがり 國
 弾き語りする「孤独」^{ラソリチエイト} 國
 滔々と酒仙真白き髭の中 國
 鬼の霍乱大熱を出す 國
 雲の峰みづうみ藍のなめ石に 國
 蛸のつつと流れゆきけり 國
 別荘に二夜三夜四夜いつの間に 國
 ことば失ふ不安恍惚 國
 香をきき無欲がよしとつづやくも 國
 雨が降るとも巡礼の鈴 國
 月清き道しろじろとつづくなり 國
 照葉紅葉がわれの装ひ 國
 ナウ 秋風に入焼くけむり散りも失せ 國
 犬笛吹けり兄ともいもうと 國
 駒下駄の音のびびきが角まがる 國

寿司屋に寄つて卵焼きなど あ
 いつの間に咲きみちておし花の坂 一郎
 うつらうつらと明け方の春 國
 平成三年八月二十四日 首尾
 於 ペンション羽黒

優秀賞

短歌行「白百合や」 奥野美友紀 捌

白百合や奥つ城までの道しるべ 美友紀
 喉を潤す山の滴り 文人
 開通の新幹線に手を振りて 眞知子
 若い画商が見せるカタログ 敏子
 突出しのおからが旨き月の宴 文
 屋台の裏にすだく鈴虫 眞幾子
 菊人形ますらをぶりに恋焦がれ 知
 相聞歌詠むひとは年上 敏
 転居先チラシの裏にさらさらと 幾
 医療費ばかり嵩む家計簿 紀
 莊川の花を訪ねし日は遙か みき子
 板前捌く針魚初物 歌子
 ナオ 銀髪に春のシヨールがよく映り 文
 着信ありのランプ点滅 紀
 難事件名探偵が鮮やかに 敏
 懺悔の部屋に涙流れ 文
 ラブコメデー隣の国のあの噂 知
 妻の座狙ひ猫好きのふり 紀
 月渡る熱爛に酔ふ二人連れ 歌

シャッター通り吹きぬける風 文
 ナウ いにしへの北前船の夢今に 文
 太鼓にあはせ跳ねる子供ら 歌
 コンクール受賞嬉しき花吹雪 幾
 鳥影よぎる苑のあたたか み

連衆 二村文人 北野眞知子 朝木敏子
 片原眞幾子 広瀬みき子 大村歌子

平成二十三年七月十七日 起首
 同八月二十一日 満尾
 於 富山市星井町公民館

岐阜土産 奥野美友紀

岐阜県文芸祭には大きな二つの特徴がある。一つは、表彰式はあるが実作会がないことである。受賞者の出席が決して多くないように見えるのも、これと関わるかも知れない。もう一つは、作品講評会の存在である。作品集にも個別の講評が載る。評はすべての部門でなされるが、句会や歌会と違って連句作品の講評会という場がそもそも珍しく、新鮮だ。

物見遊山（大好きな四字！）的な気持と、岐阜に対する心理的な近しさ（実家のすぐそばをJR高山本線が走る。この線路を走る列車にずっと乗ってゆけばやがて岐阜に着く）と、講評会というちょっと珍しい場に対する興味とがあった。言わずと知れた美濃派の本拠である。今回、連句部門の専門委員をつとめられ、また

選者のお一人・清水貴久彦氏のご逝去により、急遽、審査も併せて担当された大野鶴士氏は、獅子門道統四十一世、東明雅先生の信州大学時代のお弟子さんであり、私の先輩・二村文人民の敬愛する先輩でもあり——いろいろのご挨拶にうかがいたいような気持をもって、雛の日、列車に乗った。

今年で二十回を数えるこの文芸祭、連句を含め十の部門がある。国民文化祭（岐阜県では一九九九年に開催）のような、文芸全体を対象とした岐阜県のイベントだ。表彰式会場は「ふれあい福寿会館」、おめでたい名前からのどかな雰囲気を手想像したが、パイプオルガンのある瀟洒なホールを併設し、オフィスやカフェも有する、たいへん立派な建物であった。富山という一地方の出身・在住だから、地方における文芸の発信および推進といった発想は想像できる。表彰式の祝辞に、「市井の人」を対象とする文芸祭、という紹介もあった。応募者は、「美濃飛驒じまん」部門が象徴するかのよう、岐阜、また愛知の方が多い。その中で連句部門は突出して（と、敢えて言う）地元率が低く、応募者は全国にわたって、特徴的だ。さて、講評会である。会場となった会議室で、受賞者三名（大賞の鈴木漢氏・ご当地岐阜の森川淳子氏・私）と、審査員の大野氏・各務恵紅氏・田邊桂月氏とのやりとりがあった。当てられた時間は一時間半ほど、時間が足りないような部門もあっただろうが、こちらは贅沢だ。鈴木さんの連句また韻文論をうかがい、森川さんの存

在感に接し、私も座っている。そして時々、そうかな？と思う、そのあたりで鶴士さんが話を向けて下さる。式目についての考えや審査のポイントという話題も出る。根拠があるから選も可能となるが、その根拠を示すのはなかなかエネルギーが必要なことだろう。審査員もそれぞれ考えが違うので、という言葉もあったように思う。他の受賞者のお二人は選者の側に立つ方々でもあり、であればなおのこと、私には緊張感のある、また知り、考えさせられる場となった。

句の付け筋が明らかでない応募作品が少なくない、という話が印象に残った。連句に親しくない人と一座する時などに、むしろベタ付けになることをまず警戒する。親句・疎句。しかし、ベタ付けを嫌うあまりひねりすぎた付けを試みようとするのは、ありそう。ばらばらの句を適宜組み立てて一卷に仕立て上げるのが連句か、という話もあった。そうでないからこそ、付け筋ははっきりしていなければならぬ。そもそも、付け筋が明らかなこととベタ付けとは、別である。改めて知らされたと感じるのは、当たり前になっただけでいなかっただけということだろう。岐阜の、大切な土産のひとつである。

文芸祭の作品集に、私は次のような小文を寄せた。

夏の日、能登七尾の山道をわけ入り、江

戸時代の俳人・岩城司鱸の墓をたずねました。俳書『百合野集』（幾暁編）に跋文を寄せた司鱸に捧げる白百合の花。そんなことを思い出していたのですが、このたびの巻、支考門であった司鱸が御錦地に寄せてくれたのかもしれない。それはそれ、袖振り合いながら巻く一巻はまるで旅のようです。どこへ連れていつてくれるやら。これからも大いに友との珍道中を楽しみ、遊びたいと思います。

どこへでも行かれるような心持で、今の、次の、未来の、連句の旅を楽しんでいきたい。

蕉風俳論抄 『去来抄』（向井去来）より

支考曰く「付句は付くるものなり。今の俳諧、付かざる多し」。先師の曰く「句に一句も付かざるなし」。去来曰く「付句は付かざれば付句にあらず。付き過ぐるは病なり。今の作者、付くる事を初心の業のようにおぼえて、かつて付かざる句多し」。（中略）去来曰く「付物にて付け、心付にて付くるは、その付けたる道筋知れり。付物をはなれ、情を引かず付けんには、前句のうつり、句ひ、響きなくしては、いづれの所にてか付かんや。心得べき事なり」。去来曰く「蕉門の付句は、前句の情を引き来たるを嫌ふ。ただ前句はこれいかなる場、いかなる人と、その業、その位をよく見定め、前句をつきはなして付くべし」。（修行）

温故知新

7. 付ける能力とネアンデルタール人

● 「認知的流動性」が心の堰を乗り越える

ステイブン・ミズン (Steven Mithen) 著
『心の先史時代』青土社 一九九八年刊より

ある現代の燧石加工家にして考古学者は、最近、「今日でさえ、石器文化のテクノロジーを研究する学生で、上質のルヴァアロア石核や剥片を作ることにかけて、ネアンデルタール人の熟練のレベルに達する者はほとんどいない(……)」と述べている。(p160)

初期人類(編注・ネアンデルタール人など)の心は同じ基本的な型をもっていたと言ってさしつかえない。つまりスイス・アーミー・ナイフのような心の状態である。彼らには多様な知能があり、それぞれが特定の行動領域に充てられ、それぞれの間にはほとんど相互作用がなかった。実際我々は、聖堂にいくつかの礼拝堂がばらばらについており、それぞれの礼拝堂ではそこでしか行われぬ思考というお勤めが行なわれ、礼拝堂の外では聖堂のどこからもその音が聞こえないようなものとして、初期人類の心を考えることができる。(……)初期人類はある面では我々ととても似ていたように見える。それは、こうした特化した認知領域があったからで

ある。一方、彼ら是我々とはとても違うようにも見える。現代人類の心に欠かすことのできない要素が抜けていたからだ。それは認知的流動性である。(p191)

この像はライオンの頭をし、人間の身体をしている。これが上部旧石器時代の南ドイツの集団における神話的存在を表していると証明することはできないが、(……)そのような存在を想像する能力には、社会的知能と博物的知能の間の流動性が必要になる。(p216)

現代人類の心への進化の決定的な一歩は、スイス・アーミー・ナイフのような構成の心から認知的流動性を持った心への切り替わり、特化した心から一般化した心への切り替わりだった。これにより、人類は複雑な道具を考え出したり芸術を創造したり宗教的なイデオロギーを抱いたりすることができるようになった。(p258)

解題●今回は、一気に「温故知新」シリーズのこれまででもっとも古いところに遡る。数百万年前から二万数千年前にかけての話題。

「認知考古学」は、考古学と認知心理学とが交差する領域を探る新しい学問。まさに「温故知新」の見本のようなアプローチだ。人の心の働きの解明をめざす認知心理学の最新の知見に基づいて、考古学的な遺物や遺跡の持つ意味を分析しなおし、そこからまた人間心理についての認識を深め、と「知新温故知新温故……」のプロセスを繰り返す。ステイブン・ミズンはそのパイオニアの一人。

人類は、オーストラロピテクス以来、あるいは類人猿以来、数百万年かけて、様々な事柄に対処する個別の能力を進化させた。ネアンデルタール人(ホモ・ネアンデルタールンシス)に至って、それら個別能力の一部は、現代人(ホモ・サピエンス)さえ及ばないレベルに達し、脳容積も現代人を凌ぐ。それはいわば、高性能のワープロ専用機、電子辞書、デジタルテレビ、デジタルオーディオ機器等々を別々に一つの頭蓋骨に詰め込んだようなものだ。それらの諸機能は高性能ではあるが、個別に、それぞれの特定の目的のためにしか使えない。

体格、体力も脳の大きさも(おそらく脳細胞の数も)ネアンデルタール人に及ばぬクロマニヨン人(ホモ・サピエンス)はしかし、部分が特定の機能に特化することなく、全体を汎用的に使えるように構造化された脳を手に入れた。異種の事柄の間に、相似、相同、相関性等を見いだし、ある事柄についての能力や知識を分野を超えて他に応用することで、全く新たな別の認識、技術、表現等を生み出すことのできる能力、「認知的流動性」(Cognitive fluidity)を獲得したのである。それによって、人類の文化、技術、社会が爆発的な進化をはじめたことが、様々な考古学的資料から確認される。それを持たなかったネアンデルタール人は、二万数千年前に絶滅した。「認知的流動性」とは、いわば「付ける」能力だ。ネアンデルタール人に「付け」はできなかっただろう。連歌、連句、特に「句付け」の蕉風俳諧は、まさに「認知的流動性」のエッセンスそのものを表現する文芸形式ではないだろうか。本書を読んでいると、連句というものが特殊に日本的な過去のものでなく、むしろ人間にとつて最も普遍的、本質的な能力にかかわる、すぐれて未来的な、未知の可能性に満ちた文芸形式だと思われてくる。(斎)

卯遊庵宗匠とつらつら会
橘 文字

長く湘南連句うらら会を率い、明雅先生をして、女幡隨院長兵衛だね、と言わしめた卯遊庵志げ子宗匠は、平成十七年十二月、一年間の闘病の末彼岸に旅立たれました。また、こちらも長期にわたり癌と闘っておられたうらら会の古参会員田村満子様も、翌十八年の新春早々、後を追うように逝かれたのでした。

うらら会は、鎌倉駅前の大功寺（おんめ様）を会場に、月例会を一回、ひと頃は二回行って、明雅連句を続けてまいりました。美濃焼の盃をいくつも常備し、美味しい酒肴を取り揃えての楽しい会でした。

一時、おんめ様のお隣りの鎌倉公民館に会場を移した時もありましたが、なにしろ桃径庵和子宗匠と卯遊庵志げ子宗匠を擁したうらら会です。お茶、お茶だけの公民館は性に合わず、またまたお寺に舞い戻って、酒あれば佳句あり、酒ありて愉しの会を続けることになりました。平成十六年十一月明雅先生の一周忌熊本の墓参に「ちよつと検査入院をするのでおみやげは辛子蓮根ね」と見送って下さった志げ子さんは、そのまま長期の入院となってしまわれ、満子さんも同様に、所は遠く療養生活に入られたのでした。

ふり返ってみると、明雅先生のご指導を受け、桃径庵和子先生にお運びいただいで学んで来たうらら会の特徴は「軽み」だったと思います。花は地味な花、恋もしおりのある恋でありました。

総帥志げ子さんの、和子宗匠に劣らぬ洒脱な句には、これが俳諧と感じ入ったものです。

うらら会もその後は会員が少くなり、最後に入った一人と後から三番目に入った一人の、二人だけの会を続けて来ました。このたび七回忌を催すに当り、旧会員の方々に馳せ参じていただいて、卯遊庵宗匠も満子様も喜んで下さっていると思います。

卯遊庵志げ子宗匠・田村満子様七回忌追善歌仙「冬構」の巻 吉藤一郎 捌

冬構リスの尾いよよ太りけり 志げ子仏 一郎

続く小春に弾む里山 文子 一郎

絵具溶き画布に向ふも嬉しくて 代々子

こだはりを持つ紅茶銘柄 満子仏 文子

記録的ドミノ完成月昇る 瑞枝

休暇明けとてつもるおしゃべり 良子

ひは色の小賀玉拾ふ秋の宮 魚女

能の舞台を鳶職が組む 文子

笑み含む瞳にけふも迎へられ 枝

君かき抱き共に見る夢 代

五輪へとまでしこジャパン期待負ふ 文

オーバーチャーに汗のシンバル 枝

月の浜ひたひた寄せる青葉潮
地産地消の樽酒の味
クレーン車運転免許取得して
GOのひと声映画監督

花の雨傘を断り濡れて行く
板塀小路伝ふ春宵

ナオ 睦五郎干潟の砂を跳り出る
真白き旗の風と戯れ

野の道にサイクリングの長き列
籠につめ込むチョコと鉛玉

年金は減らし増税政権党
仮設住宅残る虫鳴く

健やかでお暮らしですか初便り
そろそろいいかな七回忌過ぎ

平服で誓ふケルンの教会堂
天蓋付きのベッドスウィート

学究の徒に賞ありて月今宵
糸瓜の水を常用とせる

ナウ 風見鶏茸料理のビストロに
紅の襪紗を愛づる老母

療養の友慰むる二重唱
肩の力を抜いた生き方

古書市の開かれてある花の寺
きいきいきこと園児ぶらんこ

連衆 橘文字 橘野代々子 大窪瑞枝
本屋良子 加藤魚女

平成二十三年十二月七日 首尾
於神奈川女性センター

●第百二十回例会（初懐紙）が開催されました

一月十五日（日曜日）、ホテル・フロラシオン青山にて第百二十回猫蓑会例会が開催されました。歌仙の実作を十卓に分かれて行いました。当日の歌仙作品は今号の二ページから六ページに掲載されています。

●第三十一回連句協会総会が開催されました

三月十八日（日曜日）、日本青年館にて連句協会第三十一回総会が開催されました。協会総会議事、アトラクションに引き続き、二十四卓に分かれて連句実作が行われ、その後会場を移して懇親会が行われました。

●今後の予定

●第百二十一回例会

平成二十四年藤祭俳諧興行
 亀戸天神社鎮座三百五十年祭奉納正式俳諧興行
 二十韻実作
 四月二十四日（火）
 十二時～十七時（受付十一時より）
 於 亀戸天神社

●第百二十一回猫蓑同人会総会

六月十七日（日）
 十一時～十七時（受付十時半より）
 総会后、歌仙実作
 於 新宿ワシントンホテル新館

●第百二十二回例会（平成二十四年度総会）



総会后、歌仙実作

七月十八日（水）

十一時～十七時（受付十時半より）

於 江東区芭蕉記念館

●第百二十三回例会

芭蕉忌正式俳諧興行
 明雅忌脇起源心実作
 十月十六日（火）
 於 江東区芭蕉記念館



●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・山寺たつみ様 平成二十四年二月 五千元
 ・根津美紗様 平成二十四年二月 二千元
 ・天の川連句会様 平成二十四年二月 六千円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●猫蓑作品集の刊行休止について

・昨年まで二十一年間、毎年一巻ずつ猫蓑作品集を刊行して来ましたが、創刊当時と現在では様々な状況が変化してきているため、今年には刊行を見合わせ、今後の刊行形態、内容、体制などについて抜本的に再検討することになりました。

●受賞

・第二十回岐阜県文芸祭連句部門
 第二十回記念賞

短歌行「胡弓泣く」の巻

遠藤央子 捌

P7に掲載

優秀賞

短歌行「白百合や」の巻

奥野美友紀 捌

P8に掲載

●作品集・書籍など

・『句集 青黛』野口明子著
 ふらんす堂刊 二四〇〇円＋税
 ・『二飛び四飛び連句パーティー』松島アンズ著
 英光社刊 一六〇〇円＋税
 ・『魚すいすい 連句を泳ぐ』鈴木美奈子著
 銀の鈴社刊 二二〇〇円＋税

●訃報

・会員の海野海砂さんがご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

●猫蓑会オフィシャルサイトが移転しました

・猫蓑会オフィシャルサイトを置いていたプロバイダーの廃業に伴い、サイトURL（インターネット上の住所）が移転しました。当分の間、旧URLにアクセスすると自動的に新ページにジャンプしますが、早めにブックマークを更新して下さい。

・新サイトのホームページURL

<http://www.neko-nino.org>

季刊 『猫蓑通信』第八十七号

平成二十四年四月十五日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社